急がれる大学の国際化　日本経済新聞-1985.09.09

日本経済新聞　昭和60年(1985年)9月9日(月曜日)

教育

急がれる大学の国際化

東京外国語大学教授
国際関係論
中嶋　嶺雄

毛沢東のスローガンであった「造反有理」が日本の大学を席捲(けん)した大学紛争の時代から、もう十七年もたった。当の中国は、毛沢東時代とはすっかり変わって、いま新しい再生への道を歩み始めている。ところが、日本の大学は十七年後の今日もほとんど変わっていない。少し変わったのは入試制度くらいで、大学は、その殻に閉じこもったまま安閑としている。わが国を取り巻く国際環境もわが国の国際的な地位や役割も、この間に画期的な変容を遂げた。にもかかわらず、わが国の大学はこのような変化に対応した改革にほとんど成功していないように思える。

国際的な役割果たしてない

このように書き出すときまって出てくる反論は、大学はあくまでも学問の世界であって、国際化とか国際環境の変化といった国家的な要請や実学的な風潮に染まるべきではない、あるいは、GNP大国日本の先兵を養成する場であってはならない、といったタテマエであったりする。だが、こうした論議は社会の発展の方向と矛盾しているだけでなく、今日の若者が大学に抱いている「人生のおどり場」としての大学像とも大きくかい離している。

もとより私も大学が学問の府であることを強調したいし、また学問とは本来、実学であるよりは「虚学」であるべきことを主張する者であるが、いま私が国際化時代の大学のあり方をめぐって、右のようなスタートライン以前の事柄を書かねばならないのは、私の知る限り、当の国際化への抵抗が大学人の間にかなり根強いからである。このような日本の大学の閉鎖性、特に社会科学分野の非国際性については、すでに数年前にOECD調査団のすぐれたレポートが出ていたが、いかに臨教審が提言しようが世論が高まろうが、「大学の自治」が保証されている現状では、当の大学人が国際化への対応の意欲と意思をもたない限り、百年河清を俟(ま)つ、の感を否めないのだ。

私はこれまで公私とも、あまりにも教育の現場に密着しすぎているためか、いわゆる教育論議にはどうも積極的になれなかった。そもそも教育とは生や死と同様に各人がそれぞれの体験に基づく意見をもち得る事柄であるので、論議にふけるより自身を慎むべきだとの気持ちもある。しかし、最近の臨教審第一次答申もあって、大学教育もその対象になっているので、ここでは大学の国際化と大学の「開放」(門戸開放)ではない)化という緊要な問題についてのみ、私見を述べてみたい。

外国人教師の導入を

特権取り除き開放化も図れ

まず大学の国際化についてであるが、日本の大学や教育全般は安保だ乗りならぬ教育だ乗りに甘んじている。それは、わが国がこれまで実に多くの学問や制度を外国に学び、多数の人材が外国へ留学したのに、この海のケースについてはきわめて閉鎖的であって、わが国は今日の国際的地位や役割に見合う国際化をサボっているという意味である。

これは大学教育に限らず、たとえば高校生レベルの留学についても言えることであって、過去三十年間、わが国の高校生がアメリカに多数留学し、多くの成果を上げてきているのに、アメリカから日本に一年間留学する高校生を受け入れる高校(特に公立高校)はきわめて少ないことによって知られよう。

高度な国際人養成機関必要

大学に関して言えば、わが国の大学ほど民族主義的な大学は少ないのであって、特に国立大学においては外国人スタッフは語学教師以外、まだ教えるほどしか存在しない。英米文学や西洋史あるいはアジア社会論を教えるのに、なぜ日本人でなければならないのか。私が勤務する大学の場合、Foreign Studies(外国学)が建学の理念にうたわれた国立大学であるのに、各語学科に配属されている外国人語学教師以外は、百数十人のスタッフのうち外国人は一人のみであって、話にもならない。半分といわずとも三分の一、いや一割でもいいから外国人が教壇に立ち、大学運営にも参与するようになれば、日本の、それも大学の中だけで通用するような価値意識が挑戦を受けるのだから、それだけで大学の中がどんなに風通しがよくなることか。

講義は日本語でなく、英語でもそれぞれの地域言語でもよい。そうなれば学生の外国語能力も格段に進歩するだろう。日本の高校や中学にもどんどん外国人教師を導入すべきである。英語教員などは各校に最低一人は外国人を擁すれば、それだけで膨大な数になり、当面の貿易摩擦の解消にもなるだろう。こうした大学や教育の国際化とともに、大学院大学を中心とした高度な国際人養成のための教育・研究機関がますます必要になるだろう。

わが国はいま経済摩擦に悩んでいるが、やがて教育摩擦が生ずるだろう。そうなる前に手を打つべきであり、それはGNP一%枠以上に重要なわが国自身の生存の戦略なのでもある。

人事や諸制度も情報公開を

第二に大学の「開放」化であるが、実は国際化は大学の開放化を伴わない限り実現しないであろう。大学の開放化とは、既存の大学の特権や障壁を思い切って取り除き、大学を国民各層にもっと開放することである。その一環として、人事や学内諸制度に関しても、そのつど情報を公開し、また特に国立大学に関しては、国民の税金によって営まれている国民の大学なのだという意識を、大学側も国民の側ももっと積極的に持たねばならない。そのようなチャンネルが閉ざされているがゆえに、国有財産の管理という名目でキャンパスを国民に閉ざして市民の自由な入構を拒んだまま、大学人は社会の動きに鈍感に勝手気ままなことができるのである。

しかしここでも現行の大学設置基準や教育公務員特例法がある限り、大学の開放化は無理であって、様々な論議の末に結局何も変わらないこととなり、「大学の自治」という名の無責任体制と保守主義ならぬ旧守主義が大学を支配することになりかねない。わずかばかりの既得権益と横平のしがらみの中で自縄自縛になっている状況においては、大学改革は絶望的なのだ。

いま私はまたまた書の原稿を西欧型大学発祥の地、西独のハイデルベルクに滞在中に書いている。ハイデルベルク大学の歴史をみるにつけても、大学というとすぐに建物やキャンパスが壮大であることを競うという風潮から自由になって、もう一度、Universityの語源が広く開放された知識を学際的に花開かせることにあるのだという原点に立ち戻るべきだ、とこの町の美しいたたずまいの中で考えている。

かろやかに

鍛える

◇◇ イヤホン

山梨県立甲府西高新聞に、こんな記事が出ていた。

AA君は部屋の中でパソコンと向かい合っている。B君は外で走りまわっている。A君が部屋の中でTVゲームで遊んでいるとき、B君はサッカーをやっている。

A君はコンピューターに夢中で、友達は少なかった。B君はスポーツマンで人気があった。しかし、A君も同じくらい人気があった。学校でコンピューターを使っていたからだ。今まで人気者というとB君のような明るいイメージの子をいった。しかし、今ではA君のようにメカに強い子にも人気が集まる♥

むかし、若者に"教養"という青春の必需品があって、哲学、人生論、文学などに若者が涙まなければならないメニューがあった。「こころ」(漱石)、「ジャン・クリストフ」(ローラン)、「狭き門」(ジイド)、「三太郎の日記」(阿部)などがそれだ。また総合雑誌や映画、音楽なども教養をつけるために必要だった。

これが、戦後の一定時期からハウツーものに代わった。戦時中の精神主義への反発だろう。

ところが、経済の高度成長が終わるとともにモラトリアム気分が広がると、若者たちは昇進や栄達よりも、現在の身辺問題をどう解消するか、どう楽しくやっていくかという趣味のものに代わり、クイズ・雑学という"教養"になっていった。

それが最近ではマイコン、パソコンの類にかわった。かつての若者が難解な哲学書に挑戦したように、今の若者はコンピューターに取り組んで思考力を存分に活動させ、そこから刺激を受けて創造的なものを生み出している。またかつて、先哲・文豪の世界を知ることによって、卑小な自己を補完し拡大したように、コンピューターの操作によって自分の能力を大きく増幅したような喜びを感ずる。さらにコンピューターが言語、音楽、絵画なども処理できる性能を持つようになったから、"代理教養"としての効用は大きい。

ただ、教養は知識を求めるより、磨かれた知性で自己を豊かにしようという自己陶冶の意味を持っているが、コンピューターがそうした内面の活動を助けてくれるかどうか、疑問もあるが……。

(K)

コンピューターで自己変革できるかな?